英雄王奇譚

夏奈々那々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄王奇譚

【Ｎコード】

Ｎ７８６６Ｘ

【作者名】

夏奈々那々

【あらすじ】

Ｆａｔｅ本編とは色々違う英雄王の話。本編に少しだけ沿いながら、全然別の小説になります。だからといって別に英雄王が良い人、ってことはないのでご注意を。のんびり書いていきます

プロローグ

王を王たらしめる物はなにか。
人民かと問われれば否である。
国かと問われればそれもまた否である。
矛盾しているようだが、王が王たる理由は王であることであり、そこに他の物など存在し得ない。
たとえ平民にどれだけ糾弾されようと、どれだけ土地が奪われようと、城の外壁が押し崩されようとも、その者を王として認識する者がいる限りは王なのである。
そして認識するのは民草だけでなく、その本人が自らを王だと思い、疑わなければ、例え自己を知るモノが存在しないとしても、王は王なのである。

（そうだ、我（オレ）は王（オレ）だ）

泥に沈んだ意識。様々な感情が自己の中へと流れてくる中、それは唐突に覚醒した。
泣き叫ぶ子ども？女子（おのこ）？男？そんなものはとうに踏み越えてきた。
炎に包まれる村々も、雑兵に攻め込まれる町々も、天牛に滅ぼされる街々も、その中で死んだ人間も、全て己が既に踏破した道だ。
こ■■全■の■、と言っただろうか。その程度の■がどうしたというのか。
その程度の悪意など、とうの昔に踏み下したではないか。

（その我が（オレ）――この程度に飲み込まれると？）

泣き声がどうした。
燃え盛る炎がどうした。
崩れ落ちる城壁がどうした。

（王（オレ）を嘗めるなよ雑種共）

※

急速に浮上する意識とともに眼を開ければ、そこは確かに見覚えのある場所だった。
瓦礫の山と、濛々と上がる煙、抉られた地面。
己の国ではない、そう、聖杯戦争で騎士王（セイバー）と争った場所だ。

「フンッ。我があのような小娘に負けるとはな」

しかし、と自分の体を見やれば何の不自由も感じられなかった。
受肉しているのか、と問われればそれとは明らかに違う感覚。どちらかと言えば”繋がっている”ような感覚がある。
言峰綺礼かと思い、集中してみたが違う。薄く、糸のように細いパスが通ってはいるようだが、それとはまた別に巨大な何かと強固に結ばれている。

「まぁいい。だが聖杯は破壊された、か」

となると、手に入れようとしたあの小娘もこの世界に存在しない

のだろう。実に惜しいことをした。極上に愛で、堕落させようと思っていたのにそれも叶わず仕舞いとなってしまった。

「起きろ言峰」

容赦無く倒れている言峰の体を蹴りつけてみても反応はなく、その体を横に転がしただけで目を開けはしなかった。
よくよく観察してれば、胸には大穴が開いている。

（虫の息か。ツマらん）

既にこの男がいなくても現界出来ている彼にとって、言峰という対象の価値は既にないと言ってもいい。
それでも僅かに興味が残っていたのは、言峰綺礼という男の在り方であろう。漸く野望を、自分の道を見つけたような歪んだ願望の先を見てみたいと感じたからだろう。
無言で見つめていれば、言峰の心臓のあった場所から黒い何か――そうあの泥が吹き出してくるのが見えた。

「ほ――――う」

ドクドクと脈打つソレを見て、興味深そうに――――否、実に興味深いと嗤う。
コレが心臓の代わりをするというのなら、ある意味それは永遠の生命のようなものと言えるだろう。
最も、この程度の泥など己はとっくに飲み干してしまったわけであり、そしてその程度の泥を飲みきった所で永遠の命など得てもいないわけだが。
それに、いくらコレが魔力の塊だとしても、自分の性には合わない。汚らしい泥に縋って生きていくなど、王にあるまじき行為であ

る。

「――この泥の力で繋がっているというのも気に食わんが」

今は仕方ない、吐き気を催す程に遺憾ではある。それでも現状ではどうすることもできない。

そして、繋がっていると言っても言峰とではない。先言ったように、言峰とは細いパス、切ろうと思えば簡単に切れる程度のモノしか繋がっていない。

ならば、自然に繋がっているのは聖杯ということになる。それも生粋の聖杯ではなく、セイバーに破壊された玩具（がんぐ）の方と。

「欠片になろうともある程度の魔力を貯め、供給できるとは何とも便利な玩具よのう」

やはり我が財物庫に入れるにふさわしい。もはや言峰に対してその視線を向けることなく、その口に歪ませた。

（さて――）

如何するか。言峰が起きるまで待ってもいいが、それでは些か暇だ。それに、いくら泥があるとはいえ、目覚めるとは限らない。そして、そのような曖昧なものを待つつもりもなかった。

それに今現在、彼の興味は聖杯やあの騎士王だけに向いているわけではない。知識では知っているし、前マスターである遠坂時臣にもある程度案内させたが、それでも見ていない部分がこの世界には多数ある。

だからと言って、王である自分が自由気ままに闊歩すれば、愚民たちが騒ぎ立てるのは目に見えている。

騒がれるのは王として些かの不満もないが、煩いのは好まない。

つまり、このままで出歩くには不便があるということだ。

「ならば仕方あるまい」

王の財宝（ゲートオブバビロン）から取り出したのは小瓶に入った液体。それを躊躇うことなく煽る。

「ぐ……相変わらず不味い。あぁ、言峰はそのまま捨て置け。死んだなら死んだで良し。生きるのならばそのうち見ることもあるだろう」

誰かに言い聞かせるように言って———彼はその姿を消した。

※

「勝手なこと言うなぁ……」

彼が姿を消した場所に立ったのは一人の少年だった。

困ったように、それでいて呆れながら向けた視線の先にあるのは虫の息である言峰の姿。確かに死なないとは思うけれど、場所を移動させてあげるくらいはしてあげてもいいと思う。

それでも手を出さないのはやはり彼の言葉のせいだろう。勝手に何かをすれはその分後々口うるさくなるのは目に見えている。

「はぁ……」

結局少しだけ移動させることに決めた。彼に小言を言われる程度ならいいけれど、このままの言峰を他の一般人に見つかるほうが困ることは目に見えている。

少年の体には不釣合いなほど普通に言峰を背負い、元に戻った時きっと彼は文句を垂れるんだろうな、と半ば確信を持ちながら、少年はその場を後にした。

プロローグ（後書き）

誤字脱字などありましたら連絡どうぞ。

異常事態

少年にとって、この世界は生きづらい――――ということなかった。
手元には僅かのお金があるだけで全ては事足りてしまったからである。
物を買えばそれが別の場所でより高く売れ、宝クジでも買えばそれは必ず自分に利益をもたらした。
街の人たちは自分に必要以上に優しくしてくれるし、こちらの言葉を疑わないお人好しのような人たちばかりだ。
親がいない、とでも言えば簡単にアパートの一室を借りることも出来た。家賃もいらない、とは言われたけれどそれではせっかく稼いだ（？）お金が無駄になってしまうので払うことにしている。
と言っても払い続けていたのも始めの二年程度で、管理人さんに一ヶ月ごとに払いに行くのも手間なので一度に三年分渡しておいた。もちろん渋られてしまったけれど、それは押し切った。
と、そこまではよかったわけだが、二年を過ぎたあたりで不意に身体に異変が起きた。
ざわざわとざわめくような感覚。決して心地良いとは言えないその感覚が少しずつ強く、大きくなってきていた。

「異常事態……なのかな」

呟いた少年の視線はテレビから外され、窓の外へと向けられた。
それほど遠くない場所で何か、自分に影響を及ぼす何かが行われている。
鏡を見てみれば自分の右頬には奇妙な紋様が走り、幼い頃から変

わらない鮮やかな金の髪には所々黒が入り交じっている。

「おのれ有象無象の雑種如きが……余計なことをする」

少年がいた部屋には既に少年の姿はなく、そこには少年と同じように鏡に顔を向けながら、しかし少年とは似ても似つかない親の仇敵でも見つけたような形相をしたギルガメッシュが在った。

服装はあの金色の鎧ではなくなっていた。否、同じ鎧であるはずのそれは黒く染まり、金色である部分など存在せず、代わりに血のような赤い紋様が所々に浮かび上がっていた。

ガシャンと、壁掛け式の鏡が拳の衝撃で破片へと変わる。同時に壁にフレームがめり込んだが、そんなこと知ったことではないとばかりにその視線を窓の外へ向けた。

距離はそれほど離れていないのはわかっている。自分の身体能力なら一分と掛からず着くことが出来るはずだ。

人目を気にすることなく、夜の町へとそのまま飛び出した。

※

少女にとって、そこは地獄であった。

身体中を這いずる複数の感触。少女の膨らみ始めた胸も、女らしくなってきた腰も、晒されている肢体全てを埋め尽くすように、そこには大量の蟲がいた。

少女の体だけでなく、部屋の壁、天井をも同じ蟲が蠢くその光景を見て、気持ちの悪くならない人間などいないだろう。

しかし、少女は既に反応をしなくなっていた。意識がないわけではないが、その瞳に光も映していない。

「カカカカカッ」

それを見て笑うのは一人の老人。杖を地面に立てて、蟲に沈む少女を見ながら笑みを浮かべるその姿は誰が見てもまともには見えない。

「やはりいい母体だの。遠坂め。これほどの逸材を寄越すとは」

呟いた言葉に張り付いた笑みはより深くなり、少女を見るその眼もより愉快そうに色を濃くした。

間桐にも世継ぎはいるが、全盛期と比べれば見る影もなく劣ってしまった。魔術回路の数も世代が変わるごとに数も減ってきている。そんな状態の間桐にとっては渡りに船と言って相違ない。しかも、それが大当たりだというのだから、笑わずにはいられなかった。

そんな笑い声にさえ、少女は何の反応も示さない。

（早く早く早く早く早く早く早く早く早く早くハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤク――――オワッテ）

少女に嫌悪感がないはずがない。それでも、少女には目の前にいる老人、臓硯をどうすることも出来るはずもなく、ただこの儀式がハヤク終わってくれることを祈るだけだった。

諦めにも似たそれは、少女が唯一すがりつけるものでもある。自分をこんな家に預けた父母に最初は助けを求めたし、姉にだって助けを求め、縋り付こうとした。しかし、結局誰一人として助けに来ることはなかった。

結果として少女が求めたのは早く終わってくれることを祈ることだった。やめてくれることなどあるはずがないのだから、ただ一分でも、一秒でも早く終わって欲しいと祈る。

後何分だろうか？何時間だろうか？考えれば考えるだけ欝になり、

蝕まれていく。まだかまだかと急かすほど、時間が長く感じられた。
それでも少女は祈らずにはいられなかった。早く終わって欲しいと。

（早く早く早く早く……誰か）

ふっと、何かと繋がったような気がした。家族などとは比べ物にならないほど強固に、強靭に、力強い存在に繋がった（リンクした）気がした。

「む？」

変わった雰囲気に、臓硯が笑いを収めて、少女を見やった。
助けを求めるように蟲の中から伸ばされた手。宙をさまようその手に、感嘆したように杖を二、三度地面を叩くと、それに合わせて、蟲がぞろぞろと伸ばした手にまとわりついていく。

（誰か誰か誰か———）

繋がったそれに手を伸ばす。蟲にまとわりつかれようと、その重みに腕を曲げそうになりながら、真っ暗な天井に向けて、蟲の蠢く天井の先の先に、手を伸ばす。

「———助けて……」

蟲の這いずる音で消えそうなその弱々しい声音。自分の耳に聞こえるかどうかもわからないその声に、”ソレ”は反応した。

「なななな……！？」

驚愕に声を上げたのは臓硯の方だった。少女の伸ばした手、その

甲で赤く光る”ソレ”に誰よりも見覚えがあるが故に、驚愕した。

「さく――――」

「黙れ雑種」

そして、少女の名前を呼ぶよりも先に、誰もいなかったはずの地下に響いた一声と、一本の剣によりその姿を消失させた。

異常事態（後書き）

話がいきなり二年後に飛びましたが仕様です。第五次に早く入りたいので重要な部分以外は結構駆け足になります。

※マークを追加。携帯から読んだ時に少し読みにくいかな？と気になったので文頭に五行だけ改行を追加

誤字脱字など連絡お待ちしております。

王と少女

彼――――ギルガメッシュがそこに在(い)たのは必然であった。
令呪による命令などあろうがなかろうが、彼は臓硯を殺すつもりでこの家、間桐邸へと歩を進めていたのだから。
己の高貴な身体に異常をきたした元凶への王の鉄槌。それこそが目的であり、それ以外を行うつもりもなかった。
最も、令呪の”助けろ”という命令がキャンセルされたわけではなく、ただギルガメッシュの目的(いし)と照らし合わせた結果として、その目的と矛盾を見出さなかったための最良の方法として転移をさせることが選ばれ、その場に数秒早く現れたに過ぎない。
だが本来ならば、殲滅、あるいは掃討と言うべきか、家ごと全て消し飛ばそうとしていたのだから、ある意味令呪(ネガイ)を使ったのに間違いはなかった。

「ほう、雑種。まだ生きているか。存外にしぶといではないか」

誰も、蟲と少女以外にいなくなったはずの地下室に、明らかにそのどちらに向けられたわけでもない呆れたような声がギルガメッシュから放たれた。
そして、その声に反応するようにして、少女の体から蟲が剥がれ、臓硯のいた場所へと人形(ヒトガタ)を象る。

「キキキキキサマキサマ、アーチャー！？ナゼマダゲンカイシテイ

ル！？」

老人の、人間の声というよりは虫の鳴き声に近い聴くものを不快にさせる高音が、集まった人形から周囲へと撒き散らかされた。

「雑種ですらない虫蝼（ムシケラ）であったか。そのような不快な音を出すな。王が黙れと言ったのだ、その虫を全て殺し自害するのが礼儀であろう」

どこまでも不遜に、不快感を隠すことなく人形へと命令をする。王の命令は絶対であり、それに反したモノに対して怒りで眉を顰めながら。

「それに何故我が存在しているのかだと？貴様のような蝼ごときに説明してやる必要はなかろう？疾くと失せろ蝼」

人形に向けて、容赦なく浴びせかけられるのは様々な剣や槍の爆撃。触れるものを一瞬で破滅させる宝具の嵐。

一撃で消し飛んだ人形。爆撃に巻き込まれるようにして、悲鳴を上げることもなく消滅していく蟲。

しかし、そんな爆撃の中にありながら、少女に宝具の害が出ることはない。剣戟は少女以外の蟲のみを殲滅していくだけであり、少女に瓦礫の一片すら当てることはなかった。

むしろ天井の蟲を殺傷していく最に落ちてくる瓦礫片を破壊するように射出されているようにさえ思える。

気がつけば、そこにはもう人形も蟲なども存在しなくなってなっていた。否、実際にはそれだけでなく、本来整えられた石畳も抉られ、地下の天井などは見る影もない。

「蝼が。余計なことをしなければ多少は長生き出来たものを。最も、

我の視界に入った時点で万死に値する程に醜いモノが生きながらえても無意味であるが」

見えていた蟲全てを視界から消し、鼻で笑う。そこに弔いの感情などあるはずもなく、それが当然であるような、実際に当然だと思いながら臓硯のいた場所にその場所を見るのも不快だとばかりに新しい剣で地面ごと吹き飛ばした。

「おい雑種、いつまで寝ている。王の前だ、膝をついて頭を垂れよ」

※

少女にとって、その男はまさに英雄（ヒーロー）であった。

まだ昔、遠坂にいた頃に姉と一緒に見ていたテレビの中。誰かがピンチになった時に助けてくれる救世主。

もちろん、目の前にいる存在がそんな綺麗な存在だとは思えない。むしろ物語の中では悪役（ヴィレイン）として描かれるタイプだとわかる。それでも、少女にとっては間違いなく英雄であった。

「雑種、我の威光に呆けるのは生物として当然だ。だがいつまでも寝ていることを良しとせぬ、が」

一度区切られた言葉。顔を見上げれば、少女を――――少女の露になった胸元を睨みつける紅い眼がある。

「此度はそれを許そう。動くでないぞ、雑種」

歪んだ口に、嫌な汗が流れた。

そして、硬直した少女の胸へと容赦無くガントレットのついたまま の指を――――捩じ込んだ。

「あ……」

声が出ないほどの衝撃と痛み。一瞬自分に何が起こったのか理解できなかった。

「ふん、螻が手間をかけさせる」

引き抜かれた手には親指ほどもない一匹の蟲。少女の血で染まったそれは、なんとかその手から抜けだそうと暴れた。

「ナナナナナゼワカッタ！？」

その小さな体のどこに声帯が存在するのか、甲高く、焦った声が鳴き声として漏れてきた。

「貴様は先ほどから王に問うてばかりよのう。まぁいい、貴様のような螻が王の目を欺こうなど愚かだということだ」

「ソ、ソンナズハ……」

ナイ、紡ごうとした言葉が人差指と親指でその体を軽く潰されたことによって呻き声へと変わる。

「不愉快だ、その耳障りな音を出すな、螻」

その声には苛立ちと不愉快が混ざっていた。もしもこれ以上なにか言えば、間違いなくこの男は蟲を、自分を容赦無く捻り殺すだろう。それがわかったからこそ、黙った。

「娘」

蟲を摘んだまま視線を投げたのは、自分の指によって軽く胸を抉られ、血塗れになった少女。

僅かに息の音が聞こえるが、このままでは間違いなく死に絶えるだろう瀕死の少女に向かって、口を弧に歪ませる。

「選ばせてやろう。このまま無様に死ぬも良。その穢れた身体で生きていくも良」

その言葉は決して慈悲ではない。事実、彼にとってはこの少女がどちらを選ぼうとも構わず、言わば興味本位で訊いてみただけなのだから。

「死ぬのならこのまま勝手に死ぬがよい、我が自ら看取ってやる価値もない。だがもしも生きたいと乞い願うのなら」

描いた弧を更に歪めて、手を———マキリゾウケンを持っている手を少女に差し出す。

「この螻を殺してみせよ。何も躊躇う必要もない。”コレ”は今の今まで貴様を苦しめてきた巨魁(きょかい)だ。そのまま一息に圧すればいい」

少女の小さな掌に乗せられたのは少女を苦しめてきた元凶である。それはとても弱々しく、少女が瀕死の状態で少し握っただけでも握り潰せそうなほどに柔らかかった。

（この蟲を……”コレ”を殺せば……）

この世界から抜け出せる。この暗く、汚い場所から這いでて光に当たることが出来る。ならば、誰だってこの蟲を殺すだろう。

「……」

しかし、少女は蟲をその掌から落とした。死んだわけでも無ければ、手を握るだけの力が尽きたわけでもなく、ただその上となっていた掌を縦にして、その蟲を離した

「ほう」

その行動に、浮かべていた笑みを消す。誰もが取るであろう行動を取らなかった少女の意外性に興味深いとばかりに組んでいた片手を———無論、蟲を掴んでいなかった左手を———を顎に当てた。

「キキ、キキキキ!!」

それに歓喜したように、嗤う蟲。眼から光の消えかかっている少女に、頭となる部分を向けながら、ひたすら哂った。

「ソウダ!デキルハズガナイ!ワシハカリニモソフデア———」

蟲は言葉を続けずに、黒い鉄靴の下へと姿を消した。

「王に何度も言わせるでない、不愉快な音を出すな螻」

王と少女（後書き）

呆気なく死んだと見せかけてからの呆気死。英雄王にも色々と考えがあったってこと。でも大体気分で動いているってこと。

誤字脱字など連絡お待ちしております。

王と聖職者の対談

「……」

握っては開いて、開いては握ってを繰り返す右手を眺めれば、そこにはやはり先ほどまであったはずの令呪がなくなっていた。

本来、使わなければ例えサーヴァントが消えた時、あるいは使いきった場合でなければ決して消えないはずの刻印が、その手からは確かに消失している。

「ふむ……」

神父服に身を包んだ男———言峰綺礼はそれを見て僅かに呟くだけで、刻印が消えたことに僅かな焦りを見て取ることは出来なかった。

実際には、少しは動揺したのかもしれない。しかし、それを他人が読み取れるほど、その表情が変わることはなく、いつも通り、何処か底の見えない沼でも覗いているような瞳で手を見つめるだけであった。

「相も変わらず面白く無い顔をしているな、”言峰”」

しかし、その声に氷のようだった顔に驚きの表情が加わる。よく聞き知った不遜なその声音は、間違いなく自分のよく聞き知った声だ。

「ギルガ……メッシュ」
「如何した、貴様らしくもない間抜け面を我に晒しおって」
自分が先ほどまで座っていた椅子、そこにはいつの間にか見覚えのある男が、置いてあった一口も飲んでいないワインボトルとワイングラスを脚を組みながら座っている。
「消えていなかったのだな」
驚きの表情を、笑みに変える。そうだ、この男はそう簡単に消えるような男ではなかった。
「ご機嫌なようだな」
ギルガメッシュの口元に浮かぶ笑みを見て、呟くように問いかける。
「何、思いがけず面白い物を拾っただけのことだ」
「面白い物？」
その問いかけに相手は答えず、そのままワインのコルクを引き抜き、中に溜まっている年代物の赤をグラスへと注ぐ。
（やはり、随分と機嫌がいい）
香りを楽しむようにグラスを揺らしながら、その顔に笑みを描いているギルガメッシュを眺めながら、思案する。
気難しい英雄王が、ここまで楽しそうにするのは前回の聖杯戦争でセイバーに求婚を迫った時か。あの時はパスが繋がっていたので

感情の起伏を読み取れたが、今は繋がっていないせいでイマイチ何が気に入ったのかさっぱりわからない。

（むしろ、この街に、この世界にこの男をここまで上機嫌にするものがあったか？）

考えてみればみるほど、わからない。長い付き合いとは言わずとも、それなりに理解しているつもりであったはずなのに、この男からは先ほどから繰り返している”機嫌が良い”という感情以外に読み取れない。

いくら思考の海に浸かろうとも、その答えを唯一知っている王が答えないのだから答えなど出ようはずもない。しばらく考えてから、一度その思考を切った。

「今まで何をしていた？」

別に、この質問に正答など求めていなかった。ただ、この数年でこの男にどこか変化がないかを知りたいだけだ。

「何、時臣の時に見て回ったがまだこの狭い街だけでも我が知り得ない場所が多い。王として知らぬ場所を全て熟知しておくというのは当然であろう？」

つまりは散策――――ギルガメッシュ風に言うのならば物見遊山と言ったところか。

いつの間にかギルガメッシュと対になるように置かれている椅子の前に、同じワインの注がれたグラスが置かれている。とりあえず座れ、ということだろう。

「我からも問いかけてやろう。貴様は見つけられたか？そしてそれ

を得ることは出来たか？」

ワインを煽り、その液体を全て喉奥へと流しこむ王。そして同じようにワイングラスを持ちながら、対照的にそのワインを口に入れずに首を振る神父。

「まだだ。まだ私は見つけていない。見つけなければ、探さなければならない」

――――求めなければならない。

それはどこか諦めている様でありながら、決意をしたような返答だった。

「そうだ、満たされるな言峰。満たされ、満足した貴様など見ていても飽きるだけだ」

その返答に笑みを深くする。

この王は人の業を愛する。それが正であろうと、悪であろうと、人の持つ欲を愛する。

「ではな、”綺礼”。次までに酒を充実させておけ」

相手の言葉など待たずに、どこまでも自分勝手に告げると、その身体を消す。残されたのは中途半端に残されたワインボトルと空のグラス、そして一人の聖職者のみ。

「言われるまでもない。私は求め、探し、見つけ、手に入れる」

それが、求めたものが聖杯にあるというのなら、それすらも手に入れて見せよう。例え、自分の前に英雄の王が立ちはだかろうとも

王と聖職者の対談（後書き）

少しだけ言峰君が生きているか確かめたかった話。
ついでに面白い物見つけたんだ、って自慢したい英雄王の話。……
面白い”物”？

ギルガメッシュって文字数多いからあんまり文内で多用したくないです（

感想は読ませていただいています。拙い文章ですが、やはり良かれ悪しかれ感想をもらえると嬉しいものですね。返事は……また気が向いたらで（

誤字脱字など連絡お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7866x/

英雄王奇譚

2011年11月16日10時07分発行